聖書神学舎通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.198
2024.12.1

巻頭言
Greeting

× 若井 和生
Kazuo Wakai
聖書神学舎 教師
（飯能キリスト聖園教会牧師）

Profile

1968年、山形県生まれ。静岡県立大学国際関係学部卒業後、国立フィリピン大学留学。2001年、聖書神学舎入学。05年から牧師の働きを始め、2016年より飯能キリスト聖園教会牧師。聖書神学舎では教師として教会史と日本キリスト教史を担当。

私のために…神に祈ってください

ローマ人への手紙 15 章 30 節

現在の研修生たちは人数こそ減りましたが、互いに集まってよく祈り合っているようです。最近の卒業生たちの中にも Zoom などを介して定期的に祈り合っている方々もあるようで、感心させられます。

私が神学生だった頃は、食卓とソフトボールと神学議論の交わりは盛んだったかもしれませんが、祈りの交わりはあまり深くなかったように思います。卒業後に連絡を取り合って互いに祈り合うことも、ほとんどありませんでした。

祈る必要も祈られる必要もあまり強くは感じなかった、ということなのでしょうか。現場に出て、一人では担いきれない重い課題を抱えて初めて思い知りました。「誰か私のために祈ってくれないだろうか！」　それなのに「祈ってください」と素直に言えない自分のプライドが、実に悩ましかったりするのです。

「私のために、祈ってください」と繰り返し懇願するパウロの素直な信仰から私たちは学びたいと思います。そしてパウロの働きは、背後にいる多くの祈り手たちの祈りによって支えられていたことに私たちは気づかされるのです。

私の担当する日本キリスト教史の授業では一度、バックストンやマーガレット・バーネットなど日本で宣教した宣教師たちの姿に注目します。その中で、彼らが多くの祈り手を確保するために各地を奔走している姿に驚かされます。

特にバーネットは担っていた群馬や栃木や埼玉での働きを覚えて祈ってもらうために、イギリス、スコットランド、アメリカなど世界中を渡り歩きました。自分に委ねられた働きが、祈りなしには決して成し遂げられない働きであることを、よく理解していたからでしょう。

最近、保守バプテストの日本宣教の先駆けとなった婦人宣教師ミルドレッド・クレイグの宣教レポートを読む機会がありました。秋田県の増田町や十文字町という農村地帯での働きの様子を記した後、何度も書き留めています。「どうか、祈ってください」「あなた方の祈りを求めています」「彼らのために祈りませんか」…とアメリカの支援者たちに、クレイグは何度も繰り返し呼びかけるのでした。

日本にやって来た宣教師たちの背後には多くの祈り手たちがいて、それらの無数の祈りによって日本での宣教の働きが支えられていたことに改めて気づかされました。

私たちはどれだけ祈りの交わりの中に生かされているのでしょうか。どれだけ「私のために祈ってください」と互いに呼びかけているでしょうか。そもそも、祈られる必要にどれだけ気づいているのでしょうか。

自戒を込めて言います。聖書の知識は豊富でも、祈り祈られることの乏しい頭でっかちの伝道者にならないように、互いに気をつけましょう。私たちがこの地で直面している戦いは、祈られなければ決して勝ち得ない、激しい戦いなのですから。

No.198 Topics

- p03　秋の行事から：リトリート、オープンデイ
- p04-05　証：研修生、教会奉仕、奉仕教会の声
- p06　学びの窓
- p07　聖書学研究所から

真実の愛(ヘセド)の恵み

伊藤 暢人
Nobuhito Ito
聖書神学舎 教務主任

永遠の愛をもって、
わたしはあなたを愛した。
それゆえ、わたしはあなたに
真実の愛(ヘセド)を尽くし続けた。
(エレミヤ書 31 章 3 節)

「それゆえ」で前半と後半が繋がれているように、主が私たちに「真実の愛(ヘセド)」を尽くし続けてくださったのは、主が私たちを「永遠の愛をもって…愛し」てくださったからです。それ以外に何の理由もありません。主の真実は主の永遠の愛に基づくこと。ホセア書によれば、人の神に対するヘセドは、「朝もやのよう」「朝早く消え去る露のよう」でしかありません(同 6:4)。しかし、罪深く咎重き民に対して、主は主権をもって愛し、真実の愛を貫いてくださいます。その極みがイエス・キリストの十字架です(ヘブル 9:15)。私自身、最近改めて教えられたことであり、感謝と献身を新たにしたことでした。

学舎では

そのような主の真実の愛を学舎もいただいています。1 年生は初めての前期を終え、上級生たちは学びの深まりを味わいつつ、格闘しています。一人ひとりを主がご薫陶くださっていることに感謝します。学びの中で、祈りの中で、交わりの中で、発見し、培われることが、奉仕の生涯にとっての財産です。本通信に掲載されている研修生の証し(4 ページ)に、その一端をご覧いただければ幸いです。

そういえば、数ヶ月前に首都圏を中心に、スーパーから米が消えた!と、ちょっとした「米騒動」になったことがありました。そんな折、そのニュースに応じて、あるいは、いつものように学舎のことを覚えて、卒業生やそのご家族 5 軒からお米の献品が届けられ、なんと全体で 100 キロ以上にもなりました。その事でも「覚えられているなあ、愛されているなあ」と実感したことでした。

ソフトボール大会&能登半島

秋の調整期間中に、コロナ禍で途絶えていた神学校親善ソフトボール大会が 5 年ぶりに行われました。残念ながら、持って行ったトロフィーを持ち帰ることはできませんでしたが(1 勝 2 敗で 3 位)、好天の下、楽しく親しい交わりの時になりました。また、小さな働きですが、調整期間に能登半島へボランティアに出かけた方々もありました。なかなか送り出すことができなかっただけに、漸くという感じですが、実際に行って来た人の話を聞くことは、祈りを励まされます。

来年度に向けて

10 月から来年度要覧を発行し、募集を始めました。現在の研修生数は 21 名で、このうち 9 名が卒業・修了予定者です。必要なすべての学びと訓練をいただいて遣わされていきますように、お祈りください。また、献身者が起こされ、学舎に送られてくるようにも祈らされます。全寮制の神学教育は時代の流れにそぐわないのかもしれませんが、主が「お入り用」(マタイ 21:3) としてくださるならば人が送られてくることを信じます。この事もまた、主の真実の愛に拠り頼ませていただきたく思います。

すべてのこと相働いて益となる

Retreat
リトリート

狩野 和信
Kazunobu Kano
聖書神学舎 本科3年

今年度は、津村先生ご夫妻を講師にお迎えし、
「あなたによって 私は防塞を突き破り
私の神によって　城壁を跳び越えます。」（詩篇18:29）
より、何でもありの「相対主義」時代にあって、私たちが「みことばに仕える」「みこころに仕える」「みわざに参与させていただく」ことをテーマに、リトリートしました。創造主が造られた雄大な自然に抱かれる奥多摩福音の家で、みことばを通して教えられ、主にある交わりの中で共に祈ることを通して、各々黙想の時が与えられました。

先生ご夫妻は、研修生の質問に応えながらお分ち下さいました。主がどれほど津村先生ご家族に善くして下さったのかを聞く機会があたえられ、私たちは励まされました。今回は奥様のスーザン先生ともお交わりする機会が与えられたことも感謝でした。

この機会を通して、コリント人への手紙第二12:9から、私たちの「なぜ」という問いに対して主は十分に答えて下さるお方であることが示されました。そして箴言3:6からは、私たち信仰者の学びは神様の栄光のためであり、その道はまっすぐにされることを教えられました。

信仰者のみこころに沿う探求に主は必ず応えられること、その学びによって私たちは相対主義を突き破り、それまでの障害を跳び越えることができること、そして主は、そのようにしてご自身の栄光を世に示してくださるお方であることを教えられ、益々主のみわざに参与させて頂くことを願わされる幸いな時となりました。

教会のために

Open Day
オープンデイ

中村 瑞来
Mizuki Nakamura
聖書神学舎 本科3年

今年の聖書神学舎オープン・デイは、秋晴れの爽やかな日に行われました。朝は少々肌寒かったのですが、昨年同様、早い時間から多くの方が羽村に足を運んでくださいました。私たち神学生にとって、神学舎のことを覚え、祈り支えてくださっている方々と直接お話しできることは格別嬉しいことです。礼拝や授業の時間を共有する中で改めて、神と教会の働きの一環として私たちは学ばせていただいているのだということを実感いたしました。

教職者の不足が問題視されてからもう久しい今日ですが、足を運んでくださった方の中には、主の導きを求めて学び舎を訪ねたという方もおられました。その方々に「どうして神学舎への入会を検討されているのか？」とお尋ねする度に、その回答から、主が御自身の教会のために働き手を送ろうとされていること、そして働き手の育成のために神学舎を用いようとされていることを感じ取ることができました。今もなお絶えず為されている主のみわざに期待したいと思います。

「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」（マタイの福音書9章37-38節）

献身を考えている兄弟姉妹に確かな主の導きと備えがありますように。このことをご一緒にお祈りいただけますと幸いです。

みことばに刺される

阿部 祐
Tasuku Abe
聖書神学舎 本科4年

神学舎に入学してから、様々な機会を通して、みことばに感動する経験をいただいています。例えば授業の中で、毎日のチャペル礼拝の中で、学び舎の祈祷会の中で、誰かと立ち話をしている中で、といった感じです。けれどもこの感動が、どのような感動であるのかを見分けることが大切であると、4年目にして思わされています。

みことばの感動には大きく二つの種類があるように思います。一つはみことばによって明らかにされる真理に驚くという感動です。神様のご計画の壮大さや知恵の深さに感動することです。聖書を原語で読むことから、そのような感動を得られるのは神学舎の魅力です。もう一つは、みことばによって自分の心が刺し貫かれるときの感動です。感動というよりは、悲しみや後悔、くやしさといった感情を抱かせるものです。それはみことばによって、自分の罪深い姿を知らされるからです。自分の罪や弱さを知らされることは心地よいことではありません。そのためでしょうか、私は無意識のうちに前者の感動ばかりを追い求めていました。この感動は幸いな一面もある一方で、自分に聖書の知識が増え、成長しているかのように錯覚させることもあります。

私は現在、卒業論文でハガイ書を研究しています。一度はヘブル語でハガイ書を通読しようと思い1章1節から読み始めました。ハガイ書の冒頭には神様のことを後回しにし、自分優先の生き方をするユダの民の姿が語られています。原語で読むと1章4節では「あなたがた」という言葉が三度も使われ、聴衆に迫るようにして語るハガイの息遣いを感じます。このみことばが私の罪深い姿を明らかにする神のことばとして、私にも迫ってきたのです。私は学びの手を止め、自分の姿を悲しみ、ただ神様にあわれみを乞うほかありませんでした。

このように私たちの神様は、罪深く、みことばを聞くことにおいて未熟な者をも、愛し、召してくださるお方です。このあわれみ豊かな神様に感謝と賛美をおささげいたします。

「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」
（ヘブル人への手紙4章12節）

御手の中で

橘川 弘毅
Koki Kitsukawa
聖書神学舎 本科3年

私の奉仕教会は、40 年前の聖霊降臨日に洗礼を受けた平塚福音キリスト教会です。そこでの求道と受洗を含めた信仰生活は 1 年余りでした。その後、大阪、パリ、デュッセルドルフへ転勤となり、平塚の教会に戻ってきたのは 39 年後の 2023 年 4 月に、私を奉仕神学生として受け入れて下さった時です。

39 年ぶりにもかかわらず、教会の方々は私達夫婦を温かく迎え入れて下さり、私は実家に戻って来た様に感じました。与えて下さった主な奉仕は、奇数月の第一礼拝での説教と、月 2 回のスモールグループで行われる学びのリードです。私と同年代(60 代)か年上の男性の方々との学びで、私にとって初めての経験です。幸い、原語に触れながら聖書を学ぶ事が出来る教材に導かれました。普段気が付かないみことばの深味を分かち合う、私にとっても期待と喜びの多い奉仕です。

奉仕を通して神様の不思議を思わされたのは、今年 5 月の聖霊降臨日でした。その日は私の説教奉仕の日と偶然 (?) 重なったのです。40 年前この教会で受洗した私には想像できない出来事でした。

ヨハネの福音書 1 章 51 節で、イエス様は召された 5 人の弟子達に、「あなたがたは見ることになります」と言われました。見た内容の後に、ヤコブに神様が語られたアブラハム契約が続きます(創 28:12-17)。平塚教会での奉仕を通してその一端を味わう恵みを覚え、神様に感謝します。

05 奉仕教会の声
Voices from the Churches

ハレルヤ 神学生を感謝して

山口 耕司
Koji Yamaguchi
平塚福音キリスト教会 牧師

毎週、朝早く、ご自宅を出発されて忠実にご夫妻で奉仕されている姿に、牧師としても励まされ、感謝しています。

長年、海外での社会経験を積み重ね、教会に仕えられ、今再び若い頃に受洗された私たちの教会に奉仕神学生として仕えておられる、その主のお取り計らいに主をほめたたえずにはいられません。

私たちの教会が新会堂建設の為、日曜日にお借りしている会館での礼拝の会場設営や掃除、片付け、リードする小グループでの聖書の学び、礼拝司会や礼拝説教のご奉仕、水曜日のオンライン祈り会でのお祈りに至るまで、すっかり教会の皆さんと馴染んで喜んでご奉仕して下さっています。

中でも壮年の方々を対象とした小グループの学びは、教会として必要を感じながら取り組めずにいた働きなので、神学生のご奉仕により参加者にみことばを学び知る喜びが起こっています。

始まったこの働きを今後も続けていけるように、体制を整える必要を課題として受け止めています。また、与えられている期間、神学生夫妻と共に主の祝福を担う働きを進めていきたいと願っています。

(写真：山口牧師 (中央) と橘川研修生夫妻 (両側))

File No.030

「『当時の意味』を追求する意味」

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書神学舎 校長

キリストの福音を信じる者に与えられる祝福の一つは、神の子どもとされること、養子とされることです。

この「養子」という語の含意するものは、現代日本と古代ローマのそれとでは、非常に異なるようです。前者は、読者諸氏の印象に委ねますが、どこか消極的な響きを感じることが多いかも知れません。それに対して、新約聖書の時代のローマ社会では養子は特権を想起させる語でした。家長による指定相続が原則でしたが、その際、被相続人は長男子とは限りません。権力者や資産家が、実子の有無に関わらず、自分の名前と自分の家を継がせるのにふさわしい者を抜擢して、養子にして、家督を相続させることがありました。そのような社会では、「養子」は、特別に選ばれ、指名され、特権を付与されることを意味します。非常に積極的な、特権的な響きの語であることが分かります。

もう一つ、人が神の「かたち」として創造されたことについて。その意味は、長らく、言語能力や宗教性等々と推論されてきました。考古学などに助けられて「当時の意味」が解明されるなかで、人は神の「副指揮官」として創られ、被造世界を治めることがその使命であることが明らかになってきた、と聞いたことがあるかもしれません。

このように、「当時の意味」を知ることは、聖書の読み方を整え、深めるために重要なプロセスです。私たちの文化脈絡だけで語の意味を探ることは不十分で、場合によっては不適当でもあります。聖書辞典は、聖書の豊かさに近づく助けです。良い注解書も助けになるでしょう。

一方で、神が創造主であることやイエスが十字架で死なれたことのように、人間の歴史や変化の影響を受けない事実もあります。神のご性質も不変です。それを描写し、説明する人間の言語には多様性があり、変容がありますが、神の事実は変わりません。神の基準も不動です。

例えば、人が男と女とに創造されたことは事実です。人が罪を犯し、被造世界の全体が罪の歪みを負っていることも事実です。結果、旧約時代には多重婚も日常の一部でした。それがもたらした混乱や損失は多々あっても、多重婚は「当時」は受け入れられていました。しかし、それで神の基準が変更されるということはありません。多重婚という現実は経過措置的と言えるでしょう。一対の男女が一体となることが聖書の示す本来の結婚です。

このように、聖書の用語や思想を、まず当時の意味において正確に理解することが重要です。言語の、現象を描写するという性質も覚えておく必要があります。現象が基準を動かすのではないことを認めることも重要です。そのようにして、今を生きる聖書読者に対する神のみこころを聞き分けるのです。

聖書に聞き、意味を追求する私たち一同を、神が助けてくださいますように。

2024 年度の聖書学研究所の働き

三浦 譲
Yuzuru Miura
聖書学研究所 所員

2024 年度の聖書学研究所の働きを報告させていただきます。

まず感謝なことは、準会員として津村俊夫先生の指導のもと数年にわたって研究を続けてきました伊藤暢人氏が、3 月に「ヘブル詩の並行法における動詞 yiqtol 形と qatal 形の関係 ―詩篇第 1 巻における用例研究―」を完成されたことです。今年の卒業式において、伊藤氏に神学修士のディプロマ（Th.M 相当）が授与されました。聖書学研究所にとっては、第一号の論文の完成でした。

続けて、会員として同じく津村先生のもとで、二人の方が研究を続けています。田村将氏は、ウガリト儀礼文書の研究を通して古代オリエントにおける救済理解についての研究（仮題：「癒しと救い：古代オリエントとイスラエルにおける『神の手』」）に取り組んでいます。星野仁子氏は、マラキの説得の論理と修辞の観点から、マラキ書 1 章 13 節と 2 章 3 節の釈義を中心に、マラキ書における「祝福」と「のろい」の理解の考察を深める研究（仮題：「マラキの説得の観点からみる 1:13 と 2:3 ―マラキ書における『祝福』と『呪い』―」）に取り組んでいます。

隔月の第 4 木曜日の午後に研究会が開かれ、そこで上記の二人の会員の進捗状況が報告され、発表が行われます。それに加え 2024 年度は、外部からお二人の講師をお招きしました。4 月には児玉剛先生（日本長老教会交野キリスト教会牧師）が N. T. ライトの聖書観についてお話ししてくださり、9 月にはこれまでドイツの大学で教えてこられ、現在は中国の大学で教鞭を取っておられる大嶋孝義先生によるアッシリア魔術文書に関する講義でした。

2024 年度から、「N. T. ライトの神学を問う」というタイトルで研究所の新しいプロジェクトが始まりました。プロジェクト研究員としてお迎えした児玉剛先生、そして津村先生、三浦の共同プロジェクトです。N. T. ライトについてはこれまで義認論に関わる問題としてよく取り上げられてきましたが、今回のプロジェクトではライトの聖書解釈法や聖書理解について、ライト神学の全体に関わる事柄を取り上げたいと思います。

昨年 12 月の通信における聖書学研究所からの報告ではまだ出版予定でしたが、津村先生の執筆された書籍が今年 2 月に出版されました。David Toshio Tsumura, *Was There a Cult of El in Ancient Canaan? Essays on Ugaritic Religion and Language* (ORA 55). Tübingen, 2024 (『古代カナンにエルの祭儀があったか？』) です。日本での「神さま」信仰と、カナンのエル信仰と、聖書の「神」信仰の違いを考える機会になればと願います。津村先生は 5 月初めから約二ヶ月間、英国ケンブリッジにあるティンデル聖書学研究所に滞在し、創世記 1 章 1-3 節の研究に従事されましたので、今後も先生の研究の成果が書籍として出版されることを望んでいます。

福音主義のキリスト教神学界においてさえも、現在は混迷の中にあると思われます。研究所の働きが聖書のみことばに立ち返るための助けになればと願います。引き続き、聖書学研究所のためにお祈りとご支援をお願いいたします。

聖書神学舎通信 No.198 発行者：末松 隆太郎 〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562 www.bibleseminary.jp/ 振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

教師・講師の証

主の摂理の御手の中で

遠藤 芳子
Yoshiko Endo
聖書神学舎 講師

聖書神学舎を卒業して、もうすぐ40年になろうとしています。いつの間にかこれほどの年月が流れたことに、驚きを覚えます。振り返ってみれば、卒業の時には想像もしなかった道筋を辿り、今を生かされています。大切なものが次々に失われていく悲しみの中で、しかし神のことばだけは決して変わることのない真理であり、唯一の礎であることを、身にしみて味わい経験させていただきました。これこそ、かつて神学舎の先生方から徹底的に教えられたことでした。この学び舎で学ぶことを許された恵みの大きさに、改めて深く感謝する者です。

今年度から、思いがけず授業の一端を担わせていただくことになり、大変恐れを覚えていますが、私がこれまでいただいた恵みを、次の世代を担う神学生の方々と分かち合うことができるなら、それほどうれしいことはありません。この弱い者がどうお役に立てるかわかりませんが、主への愛と感謝をもってお仕えしたいと願っています。主の不思議な摂理の御手に導かれる幸いに、心より感謝しつつ。

主がお入り用ならば

本多 卓也
Takuya Honda
聖書神学舎 講師

誰しも得手不得手があると思います。私の不得手は沢山ありますが、その一つは「ことば」です。高校時代の文理選択に始まり、できるだけことば以外で勝負できる方を選択して来ました。そんな私が、神様の不思議な導きと恵みの中で聖書神学舎へ導かれて4年間の学びが許されました。予想通り、いや想像以上に、学べば学ぶほど今の私には分からない領域がどれほど多いのかということを痛感しました。そして改めて自分のことばへの苦手意識を再確認しました。それでも不思議と聖書のみことばに向きあうことは嫌になりません。それどころか、私たち人間が神のかたちとして造られているゆえに、ことばを使わせていただけていることを知り感謝が湧き上がるようになりました。

神様に呼んで頂き、聖書神学舎で教え始めることになります。私は先輩教師方のようにたくさん知識を持っているわけでも、ことばの賜物が豊富なわけでもありません。それでも、研修生と一緒に悩みながら、学びの大海原をよちよちと進むことはできるかと思います。その中で神様の恵みを発見する喜びを研修生の方々と分かち合えれば、それで役目は果たせるのではないかと思います。主に感謝しつつ。

近況と祈りの課題

- □ 9月には「米騒動」とも称された事態の中、案じてくださった各方面からお米をお贈りいただき、一同、愛され、祈られていることを実感しました。コロナ禍の初期、手作りマスクや消毒アルコールを贈っていただいたこと等も思い出して、学舎の働きが確かに教会のわざであることを覚え、主をあがめています。他にも、果物やコーヒー等々の愛の贈り物に励まされています。
- □ 研修生一同、守られています。卒業予定者9名のうち、本科生の6名が卒論・卒研に取り組んでいます。学びと訓練の祝福、進路の導きをお祈りください。
- □ 献身者が大勢起こされるように皆で祈りましょう。神学舎にも主のみこころに沿って出願者が導かれますように。
- □ 教職員も支えられています。後期から、遠藤芳子師と本多卓也師がクラス担当を始めます。来年度は、末松師とリトル師（帰国）と野村天路師（留学）が講師を退かれ、新たに5人（青木義紀師、児玉剛師、佐味湖幸師、重田岳史師、東海林隆之師）が講師として奉仕をしてくださいます。主の助けをお祈りください。